

氏 名	村 井 潤 一
	むら い じゆん いち
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	文 博 第 7 号
学位授与の日付	昭 和 38 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研究科・専 攻	文 学 研 究 科 心 理 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	乳児の音声の体制化ならびに記号化過程

(主 査)
論文調査委員 教授 園 原 太 郎 教授 野 田 又 夫 教授 泉井久之助

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、発達心理学的見地より、正常児ならびに言語障害児の音声活動の客観的、機能的分析を通じ、音声の体制化（乳児の無意味発声が成人の音韻体系の音声として形成される過程）および、記号化（無意味発声が有意義言語として形成される過程）の両過程のメカニズムを明らかにし、さらに両者を言語化過程として統一的に把握せんとするものである。

本論文は、第1章 問題提起、第2章 文献的考察、第3章 ソナグラフ分析による乳児の音声の体制化過程 附. 音声の記号化過程の基礎資料、第4章 聴覚障害児の音声発達、第5章 中枢性言語障害児の音声発達、第6章 訓練実験による乳児の音声の記号化過程、第7章 討論、よりなっている。

乳児の音声発達に関する従来の記録法の不備がもたらした諸混乱を克服するため、著者は自然状況において追跡的に録音された資料のソナグラフ分析を行ない、表示されたソナグラムの周波数領域、フォルマントの位置、発声時間、ピッチパターンと雑音パターンの関係およびソナグラムパターンの部分的諸特徴の組み合わせ等から、その発達の特徴を客観的に明らかにすることにつとめた。

これによって、乳児の音声の体制化過程が新しく客観的に把握されたとともに、従来ほとんど思弁的に論じられてきた音声発達に関する諸仮説（拡大説と限定説、総合説と分化説の対立、母音・子音の発達方向に関する仮説等）が再検討される。

一方、ソナグラムパターンの分析から模倣の問題を音声の類似度という観点から検討し、その中でソナグラフ分析による音声研究の利点、欠点について論及し、耳で聞く方法との併用が音声発達研究にとって最も効果的であることが示された。

音声の体制化過程研究に附随して記録された乳児の記号化過程の資料は、快適状況—非叫喚発声、不快状況—叫喚のごとき状況と発声との結合関係、非叫喚発声の量と種類における優位性、喃語の中から模倣語と有意味語が形成されることといった従来の諸研究の成果を確認するとともに、喃語には従来の意味での一人遊び的喃語と他人を意識した喃語とへ分化すること、また、有意味語が形成されるためには、その

音声が模倣遊びとしていったん対象から独立する過程が存し、これが音声の記号性をもたらす一つの重要な過程であること等が新しく明確にされた。

この過程をさらに検証するために著者は聴覚障害児、中枢性言語障害児の音声発達を他の行動発達とともに記録検討している。そして中枢的な障害、学習的な要因の欠如がいずれも記号化過程にとって重大な影響をもたらすが、それが単なる有意味語の欠如としてではなく、それ以前の無意味発声の時期に多くの影響が現われること、動作系と音声系との交互作用の重要なこと、言語発達と人格発達との間に相互関係が認められることを明らかにした。

さらにより厳密にこの過程を分析するため、乳児の自然状況をできるだけ障害せぬようにしつつ、乳児に対し一定時間、特定の玩具と音声とを反復呈示し、玩具と音声との間に記号関係を成立せしめる訓練実験を行なった。この訓練は前後約6か月を要したが、とにかく訓練が成功したことは記号化過程における学習要因の重要性を示す。しかし本過程には単なる条件づけの理論では説明不可能なメカニズムが存すると著者はいう。著者はこの過程に精密な分析を加え、多くの段階に区分しているが、そこにおいて一貫して見られた事実は、乳児が対象と音声との記号的関係を一次的な欲求と結合させて学習するのではなく、いったんそのような関係を離れ、遊びの中で獲得したことであった。

著者はこのような現実適応から遊離する喃語的機能の中に、言語化の重要な契機が存すると見る。また、本実験は、訓練者と乳児との間に親密な関係の存在することが記号獲得を容易にすることを示した。訓練者が、親密な関係をもつための行動として、乳児の行動を模倣することが非常に有効であり、またこの行動は乳児の模倣活動を解発するのに有効であった。この模倣活動が母親によって行なわれた場合、子供の行動に対する一種の同一視と考えるべきではないかという。

以上の結果、附随的ないくつかの資料、ならびに従来の諸研究の成果をもとに言語化過程の統一的な把握が試みられ、言語化過程の発生的基礎として非叫喚発声と喃語の機能の重視されるべきこと、喃語の機能には一次的欲求に関係のない象徴機能の存すること、象徴機能の形成には、信号—象徴という現実適応の単純な連続説ではなく、象徴を記号の体系とは別の系列、信号体系の否定の上に成立すると考えねばならぬことを論述する。このような立場からは自発語、理解語の発生に関しても、この段階での理解語の形成過程が、現実適応の理論において説明可能であるのに対し、自発語は反応系の代置が行なわれるゆえに現実適応の理論からは説明不可能であり、したがって自発語の発生こそが、言語化にとって重要であるとし、自発語と理解語の質的な違いを因子分析の資料を中心として実証している。

以上の考察に基づき、著者は乳児における言語発生が単なる自閉的言語—社会的言語という形をとるものでもなく、言語の非有用説でもなく、音声が恣意的記号としての言語となり、高次の適応機能として成立するためには、換言すれば、乳児が言語を適応的手段として使用するためには、いったん、低次の欲求伝達的な有用性、固定的な信号性を否定する時期、メカニズムが必要であり、その条件として、文化的、社会的影響、特に養育者の愛情のこもった世話の必要性を強調するのである。

論文審査の結果の要旨

1. 本論文の価値

本論文の寄与は次の諸点において高く評価される。

(1) ソナグラフ分析と聴音記録とを併用することにより、従来曖昧であった乳児の音声発達に一応明確な資料を提供したこと。

(2) それによって従来不明確であった非叫喚発声と喃語とを区別したこと。

(3) 喃語的音声が言語発達にもつ意義を聴覚障害児、中枢性言語障害児の綿密な観察から明らかにした点。

(4) 言語所有以前の乳児に根気強い訓練実験を行ない、その過程を綿密に分析して、従来何人も実証的に明らかにし得なかった乳児の言語化過程に貴重な資料を提供したこと。

(5) 豊富な資料に基づき、一応乳児の言語化過程につき組織的な理論を提出した点。

2. 本論文の難点

(1) 実際上の困難からきわめて無理な注文であるが、資料がごく少数の乳児に限定されていること。

(2) 記号、信号、象徴等の重要な概念がまだ操作的に十分洗練されていない。したがって著者の理論に
なお若干の曖昧なる点の存在すること。

以上の欠点は認められるものの、困難な追跡的研究を実施し、その資料に綿密な分析を加え、従来資料的に盲点であった乳児音声の言語化過程についての幾多の宿題に一応統一的な解答を与えた貢献は大であり、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認められる。